

学生独自の視点と行動力を生かした限界集落活性化支援活動

鹿児島大学
法文学部法政策学科
2年 岩下大佑

1. 活動の概要(添付資料1)

高齢化の進展や人口の減少が続く鹿児島県において、地域に貢献したいと考える鹿児島大学の学生有志により、2010年3月、限界集落活性化サークル「Free Spot(フリースポット)」は設立されました。サークルでは、鹿児島県内に数多く存在し、高齢化・過疎化が著しい限界集落¹を舞台に、地域住民を始め、県、NPO 法人等と「協働」しながら、学生ならではのフットワークの軽さと若者独自の視点を生かし、

- ・集落内での地域資源を生かした「自然体験交流ツアー」
- ・鹿児島市等での「集落写真展」の開催
- ・集落内の空き家を利用した「寺子屋復活プロジェクト」等

を実施し、「交流促進による地域振興」の為に活動を実践しています。

2. 活動を行うに至った経緯(添付資料1)

法文学部法政策学科の「基礎演習」という授業において、鹿児島県内の課題についてグループ単位で主体的に調査し、その解決策を検討する機会を頂きました。その際、都市圏と比較して少子高齢化・人口減少が急激に進行していて「将来の日本の縮図」とも言われる限界集落の存在を知りました。実際に、鹿児島県は県内に占める過疎市町村割合が93%で全国1位、限界集落の割合も18.8%(全国 15.6%)と高い数値を示しています。一方で過疎地域の集落は国土の保全や伝統文化の保存などの多面的機能を有していることを学ぶことが出来ました。

こうした現状を知り、当時の2・3年生が、南さつま市のNPO 法人「プロジェクト南からの潮流」が鹿児島県との協働により実施していた集落活性化事業に参加し、「限界集落の活性化について、学生だから出来ることはないだろうか」という問題意識から、現在のサークルを結成しました。

3. 実施体制について(添付資料1)

「Free Spot」は『大学生が地域社会に積極的に出向き、地域と交流することを通し、鹿児島の地域活性化を実現すると同時にメンバー自身の人間的成長を図る』という理念の下、学部・学科を問わず、27名の学生が活動しています。実施体制としては、各地域住民の方々、鹿児島県、地域のNPO 法人等と協働して活動しており、普段は毎月集落に赴き、地域活動の支援を行っています。

また、定期的に企画提案をするための会議を実施し、話し合った内容を企画書にまとめNPO や鹿児島県に対して提案するなど、集落の支援に主体的かつ、積極的に参画しています。

4. 南さつま市金峰町長谷集落での活動

① 平時の活動(2010年3月～/添付資料2)

- ・内容: 田植えから稲刈りまでの米作りやそば栽培、陶芸窯の火入れの手伝い等を通じて、地域の方々と親睦を深めています。

¹ 限界集落…集落人口の50%以上が65歳以上の高齢者で占められている集落

②自然体験交流ツアー(2010年8月29日／添付資料3)

・内容:長谷集落をはじめとした豊かな地域資源を持つ南薩地域の魅力を学生に知ってもらうため、企画や参加者の募集等一連の取り組みをほぼ全て自分たちの手で実施

③長谷集落写真展(2011年12月15日～2012年3月25日／添付資料4)

・内容:長谷集落を題材に、過疎集落の現状・魅力を多くの方に知ってもらうために実施しています。

5. 南さつま市坊津町秋目地区

①空き家再生プロジェクト(2011年4月～／添付資料5)

・内容:NPO法人「秋目ネット」の協力の下、地域に点在する空き家のうち、1軒を借りて、学生の手により再生し、維持管理を行っています。

②寺子屋復活プロジェクト(2011年8月16日～8月18日／添付資料6)

・内容:再生した空き家を拠点に、夏休み期間中、地域の子供達に勉強を教えたり、レクリエーションを行うことで交流を図りました。

6. 活動の意義

上記の活動を通じて、地域住民の方から『学生が集落に来てくれるだけで、私たちは元気が出るよ。』『また来てね。』という言葉をかけて頂きました。この経験から学生が地域に入っていくことで、地域の方を内面から活性化出来ているのではないかと感じています。

また、私たち自身も、過疎集落という現場に出向き、実際に自分の目で現状を確かめ、それを改善するために出来ることは何か深く考えることの重要性を学びました。これは、これから社会に出ていく上で重要なスキルの涵養に繋がっていると考えます。

7. 今後の展望・総括

今後の展望としては、これまで以上にこうした集落における新たな可能性を模索していきたいと考えています。普通はこうした集落はマイナス要素ばかりが目立ちやすいものですが、それらをプラスに転換出来る取り組みをやっていくことこそ鹿児島大学の学生である私たちに課せられた使命だと思っています。

現場での活動を通じ、モノやお金ではなくコミュニケーション・話が出来る場こそが現地の方には本当に必要なものだと思えることが出来ました。また、毎回、私たち学生が訪れることを楽しみに待っていることが私たちのモチベーションに繋がっていますので、現地の方のために、これからも積極的かつ継続的に活動を行っていきます。

そして私たちの活動を外部に発信していくことで、現代の地方が抱えている課題を知り、考えてもらうきっかけを作っていきたいと思えます。

(1969字／本文のみ・項目除き)